

《書評》

高倉浩樹編 『展示する人類学—日本と異文化をつなぐ対話』

昭和堂、2015年、272頁

佐々木 亨*

TAKAKURA Hiroki ed., *Anthropologist Doing Exhibition: Dialogue between Field and Home*, Showado, 2015.

SASAKI Toru

1. はじめに

本書は、人類学に関わる展示を実践することによって、何が可能となり、それが研究にどのようなフィードバックをもたらすのかについて考察することを目的に、2008～2012年の間に我が国の文化人類学研究者7名が、日本およびインドネシア、ロシア、アメリカで開催および開催予定の展示や公演における対話と協働を考察したものである。研究者にとって展示の実践は、面倒くさく、本来の研究とは別のものと捉えられがちであるが、その考え方を覆そうとする試みである。

以下では、博物館学を専門とする立場および博物館学芸員を経験した立場から本書を批評していく。なお、本書で紹介された展示のうち、評者が会期中に足を運ぶことができたのは2つの展示のみであり、展示を観覧していないことによる批評の限界があることをあらかじめ断っておきたい。

2. 本書の構成と内容

本書は、高倉が執筆した第1章の序以下、高倉を含む7名の研究者が、展示および資料、踊り・音楽、映像、写真をめぐる7つの対話を考察した章と「あとがき」からなる。対話に関する章では、その展示や催しなどに係わった方が執筆したコラムが掲載されている。

以下に目次構成と各章の内容を紹介する。なお、コラムのタイトル等は省略した。

*北海道大学大学院文学研究科教授

第1章 序 展示する人類学（高倉浩樹）

第2章 地域資源をめぐる対話 タナ・トラジャにおける〈ジュズダマ研究スタジオ〉展（落合雪野）

第3章 動物遺骸をめぐる対話 大阪市立自然史博物館における〈ホネホネサミット〉（山口未花子）

第4章 展示品をめぐる対話 北海道と東京における〈北米先住民ヤキの世界〉展（水谷裕佳）

第5章 博物館をめぐる対話 国立民族学博物館における〈ホビの踊りと音楽〉公演（伊藤敦規）

第6章 音声資料をめぐる対話 母語における〈ダンス〉展にむけて（久保田亮）

第7章 映像作品をめぐる対話 北海道における〈アイヌと境界〉展（山崎幸治）

第8章 写真資料をめぐる対話 母国と調査地シベリアにおける〈トナカイ遊牧民〉展（高倉浩樹）

あとがき—刊行の経緯をめぐる偶然の連鎖（高倉浩樹）

次に各章の内容を少々詳しく紹介する。

第1章の序「展示する人類学」では、編者である東北大学の高倉浩樹が本書の位置づけを、「人類学的な調査研究の営みのなかで、展示という形で研究成果の公開を実践した人々の記録である。それと同時に、そこから得られた研究を社会に開くということの可能性を探究するものである」として、展示の過程の「面白さと可能性を伝えるとともに、展示実践に研究者を誘おうとするものである」としている。そこには、これまでの多くの展示は、博物館に勤務する学芸員などの職業的展示者によって運営されるものであったという前提がある。しかし近年、大学において、社会還元やアウトリーチという文脈で、社会との新しい接点を持つことを求められており、大学の研究者が展示の制作を経験するようになってきたとしている。高倉も、2007年に大学のオープンキャンパス企画で、2008年に同じく大学の公開講演会の企画として展示制作を体験した。そこで、異文化理解の実践という意味で、展示をめぐる協働は非常に刺激的であったと述べている。

本書の目的として、「人類学に関わる展示を実践することによって、何が可能となり、それが研究にどのようなフィードバックをもたらすのかについて考察することである」とし、論文や著書とは異なる成果公開の形態の社会的関与に対する実際の効用、人類学の方法や理論へのフィードバックを報告し、展示によって達成可能な学問的可能性を、より明確な論点として提示することをねらいとすると記している。さらに、もうひとつのねらいとして、展示の準備から終了にいたる過程を記録化することを挙げている。

また序では、民族展示が日本で本格化するきっかけとなった国立民族学博物館（以下「民博」と略す）の誕生と活動、展示／博物館の政治性、フォーラム型博物館の考え方、日本博物館協会が提示した「対話と連携」など、我が国の博物館をめぐるここ数十年のさまざまな状況や論点が紹介されている。

第2章「地域資源をめぐる対話 タナ・トラジャにおける〈ジュズダマ研究スタジオ〉展」は、鹿児島大学総合研究博物館の落合雪野が、イネ科植物ジュズダマの種子を用いてモノを作る文化をテーマにした展示に関する報告である。2005年の同博物館での特別展をきっかけに、2006～2009年にかけて国内外で移動展示「トラベリング・ミュージアム」を開催した。生活の中にジュ

ズダマでモノを作る文化があり、その人々が参加できる場所として選んだ、インドネシア タナ・トラジャ県で 2011 年に開催した展示を前後数年間のプロセスを含めて、この章では紹介している。

展示制作過程の記録化という面では、①構想を練る、②下見に出かける、③準備を進める、④会場をしつらえる、⑤参加者と対話する、⑥活動を記録する、の 6 つのステップにわけて詳細に報告している。これらの報告のあとに、展示制作者としての研究者である自身が伝えたいことと展示参加者が知りたいこととの間にずれがあることに、あらためて気づかされたとしている。しかも、研究者が伝えること以上に、参加者からの問いかけが多く、その範囲も広い。結局、参加者は、研究の成果以上に、研究の前提や周辺を知りたがっていて、それを知ることはじめて、研究の成果についても納得してもらえると知った。このほか、参加者が体験をふりかえるために、または会場にこれらなかった人が情報を得るために「スタジオ新聞」を発行したこと。展示制作の地元スタッフであるアグネスが一連の手法に共鳴し、特産品を販売し、生産者や訪問者が集まるための「研究カフェ」を開きたいと考えたことも紹介している。

第 3 章は岐阜大学の山口未花子による「動物遺骸をめぐる対話 大阪市立自然史博物館における〈ホネホネサミット〉」である。山口の調査フィールドであるカナダ先住民のカスカ社会において、狩猟後の動物遺骸から肉や毛皮・骨を取り出し資源として利用したものが展示の対象となっている。紹介されているのは、2009 年、2011 年に大阪市立自然史博物館〈ホネホネサミット〉に出展した展示ブースの様子である。この章の「おわりに」で、展示実践の可能性として、1 つめに民族誌では表現できないパフォーマンスができることを挙げている。山口は自身の展示ブースで、来場者に動物の毛皮や骨に触れてもらったり、彼ら・彼女らとの掛け合いをしたりした。もう 1 つの可能性として、展示の場において時間と空間が限定されているとともに共有されるということを挙げている。それにより、複数の関係者間でポジティブな意味での協働という場を創り出していると述べている。

第 4 章は「展示品をめぐる対話 北海道と東京における〈北米先住民ヤキの世界〉展」である。上智大学の水谷裕佳による展示であり、北米の先住民であるヤキの文化として仮面や儀礼に使う紙製の花などに関する展示を、2010 年に北海道大学総合博物館で、2012 年に早稲田大学ワセダギャラリーで開催した際の記録である。この中で、水谷が展示に向けて現地で資料を収集し、その制作過程をビデオに収めたことを記述している。「おわりに」では、展示品を介した人々との対話が紹介されている。保留地でベンチャー企業を運営していたキログ氏が、先住民による起業についての講演を札幌で行った際、カリフォルニアの先住民センターに昔、アイヌの長老が訪れた時の集合写真を示した。その写真を見た聴衆が、その長老はすでに他界した自分の父であると名乗り出て、世代を越えた再会があった。また、同氏はのちにヤキの集落に建設された博物館兼ヤキ文化センターの所長に就任した。その際、展示を企画するなかで、ヤキ文化を表現する大変さと難しさを理解し、日本での展示はステレオタイプにとらわれたものではなく、ヤキ文化をうまく表現していたと述べたことが紹介されている。博物館展示の企画と実施では、現地の人々と

の協働が欠かせないので、同氏のように展示の実践経験がある人が増え、先住民・研究者・展示関係者の対話の機会が増えることがよいと結んでいる。

第5章では、資料の展示ではなく、踊りと音楽に関する公演が対象となっている。「民博における博物館をめぐる対話 国立民族学博物館における〈ホピの踊りと音楽〉公演」というタイトルで民博の伊藤敦規が担当した。民博では「研究公演」と称して、創設10周年である1984年から年に数回、このような公演が開催されてきた。展示されたモノを見たり触ったり、映像や音響を観たり聞いたり、文字での解説を読んだりするのではなく、招聘された芸能集団による実演を目の当たりにすることで諸民族の現在を理解する機会としている。ここでは、2012年3月20日に催された研究公演「ホピの踊りと音楽」が紹介されている。第2節「企画と交渉」では、「ホピの儀礼」に関する調査、記録行為、儀礼具などへの物理的アクセスが保留地のトライブ政府によって厳しく制限されていることや、公演での演目選択の裁量権が伊藤にないことなどが報告されている。第3節「実務と交渉」では、広報チラシの作製時の著作権処理、また儀礼具や衣装などの調達の際に鳥類の羽根が必要となったが、ワシントン条約によって日本への持ち込みが困難であったこととその後の対応策が詳細に記録されている。最後にこの公演を、①これまでの研究・展示対象になってきた人々が、自分たちの文化的文脈に則ったかたちで、観衆を対象とする実践に参加する機会、②民博に収蔵されているホピの民族資料とそれを作り使用してきた人々とが再会する機会、③両者の交流を促進させる可能性を有する機会と位置づけている。そして、これらの機会を「フォーラム化するミュージアム」の文脈で捉えている。

第6章もモノが中心の展示ではなく、「音声資料をめぐる対話 母語における〈ダンス〉展にむけて」とあるように音声資料を対象とした、しかも現在構想中の企画に関する大分大学の久保田亮による報告である。展示の中核にしようとしている音声資料は、民族音楽学者である故谷本一之氏により、1979年～1986年にかけて採録されたアラスカのエスキモー／イヌイトの歌やドラムダンス、古老の語りなどから構成される膨大な資料群から成る。これらは、アラスカ州沿岸地域におけるエスキモー／イヌイトの芸能研究史において、きわめて貴重な歴史資料と位置づけることができるとしている。現在、この資料はご遺族の意向により、北海道立北方民族博物館に一時的に保管されている。久保田はこの音声資料を使った展示の実現に向けてアラスカを訪問した際、音声資料を公的に利用するに当たり誰から許可を得べきなのかという問題が浮き彫りになったこと。また、伝統評議会からは、展示をまずアラスカで行い、その内容が正確なものかどうか判断したいという条件を提示されたことを紹介している。「おわりに」で、展示の前提としてモノが公共領域において展示できるかどうかの問題であるとし、それはモノをめぐる人々の関係性のあり方にかかっているとしている。つまり、この場合で言うと、モノを集めた人とその家族、モノが集められた地域に暮らす人々、モノが保管されている場所に従事する人々、そしてモノを展示へと利用したいと願う人々の関係性であると記している。

第7章「映像作品をめぐる対話 北海道における〈アイヌと境界〉展」では、北海道大学の山崎幸治が、2011年に同大学総合博物館で開催された展示を紹介している。この展示は、同大学グ

ローバル COE プログラム「境界研究の拠点形成」第 4 期展示と位置づけられており、会期中の前半は第 4 章で紹介した〈北米先住民ヤキの世界〉展であり、後半がこの展示であった。なお、本書で紹介された展示のうち、評者が会期中に足を運ぶことができたのはこの 2 つの展示のみであった。

この展示のねらいとして、山崎は次の 2 つを設定した。1 つは「境界研究」とは地理的な国境のみならず、概念的な境界もあるため、観覧者が普段意識していない「境界」をアイヌの状況に引きつけて展示することであった。もう 1 つは、現在のアイヌ文化の展示のあり方について、映像資料を用いてその可能性を模索することであった。ここでは、アイヌ民族博物館（北海道白老町）において 2010 年 9 月 10 日に執り行われたベッカムイノミ（川の神への祈り）を舞台に、4 名に被写体となることを依頼し、現代におけるアイヌ文化のあり方とアイヌ民族の生活をドキュメンタリー的にビデオ撮影した。その際、儀礼の場だけではなく、4 台のカメラで各自の日常生活を含めた一日の様子を網羅的に撮影し、「日々の暮らし／伝統文化」「日常／非日常」「被写体／カメラマン」「アイヌ／和人」など多種多様な境界が存在することを表現した。第 3 節以降では、撮影前の準備、撮影、編集、映像作品になるまでの過程、展示設営、展示会期中の記録が詳細に記されている。「おわりに」で、この展示実践では、その過程で生まれた記憶や関係性の総体が、特定の展示タイトルの下にパッケージングされて記憶される点に着目している。このことは、展示という行為が、観覧者に向けられているという大前提に立ち戻れば、観覧した人々も展示タイトルという共通のインデックスの下で、対話や経験を記憶していると結んでいる。

最後の第 8 章では、高倉浩樹が「写真資料をめぐる対話 母国と調査地シベリアにおける〈トナカイ遊牧民〉展」に関して報告している。この展示は、2008 年にせんだいメディアテーク（仙台市）で、2012 年にはトナカイ遊牧民に関する調査地であるロシア連邦サハ共和国内の村の文化センターで開催された。この 2 回の展示を紹介する前に、高倉は展示という実践は人類学のなかでどう位置づけられるのか考察している。ここでは、展示を行うなかで現れた、写真をめぐるさまざまな主体との対話を「協働編集」と概念化した上で、協働とは調査者と被調査者の間の新しい関係を示しているとしている。情報提供者の肩越しから参与観察される「厚い記述」ではなく、また協働は調査地における倫理でもない。むしろ「民族誌的過程におけるあらゆる箇所において意図的そして明確に、つまり協働であることを隠すことなく、むしろ強調する民族誌の方法」であると協働を説明している。

2 つの展示の準備期間中や会期中を通して、筆者は協働で行う展示は人類学の方法や理論にとってどのような意義があるか、またその展示の社会的効果はどのように波及するかを以下のように考察している。人類学者による調査研究は、①問題への関心、②それを明らかにするための現地調査、③研究資料の分析・解釈、④論文・著作での執筆・公表である。通常、人類学者による展示では、③まで終わった研究成果を、④とは違う手法で広く一般に公開するものとしている。しかし高倉は、一度①から④まで行った上で、仙台での展示に際して、他分野の専門家や異業種の職業人である、写真家、コミュニティ・プロデューサー、空間デザイナー、学内ボランティア

と協働して、③を再度行っている。つまり、文化の翻訳作業をあらためて行った。その上で、方法としての協働が人類学の研究資料の価値を拡張させたとしている。一方、サハ共和国での展示では、その内容は仙台展示の継承版であったが、調査地において研究資料を共有することと、仙台での展示を観た市民がシベリアのトナカイ牧畜民をどう理解したかを、「シベリアへの手紙」161通を通して報告することが目的であった。仙台と同様に会期は3日間と短かったが、その村の人口1500人のうち300人近くが来場した。この「シベリアへの手紙」への返事として、「日本への手紙」185通が調査地の人々によって書かれた。それを読むと、展示された調査写真は、現地の地域社会の集合的および個人的記憶に直結していることがわかった。それは、論文という媒体における分析結果という形ではなく、調査の生資料を公開することで、人類学の研究史の文脈に囲わない形で資料を提示することである。さらに、外国人による調査の視点であるため、自文化を再帰的に見つめる契機になったと結論づけている。これらのことが最も重要な社会的効果であり、展示が仙台とサハの人々の交流という新しい関係を作り出したとしている。

第8章の最後では、協働編集の過程と展示の結果、本質主義と断片性こそが人々の異文化理解の契機を作り出す可能性があり、それ故、人類学者には博物館勤務かどうかに関わらず展示を実践することを勧めている。それとともに人類学者による展示批評も、論文や書籍に対する査読や書評のように活発になる必要がある主張している。

高倉による「あとがき—刊行の経緯をめぐる偶然の連鎖」では、展示を実践することで学問の刷新につながると直感的確信を得た落合（第2章担当）との出会いや、展示する研究者の共同研究のことが記されている。

3. 意義と課題

本書は、展示などの準備・制作過程や会期中における「対話」や「協働」をキーワードに、展示などによって達成可能な「学問的可能性」を明確に示すことを目的としている。併せて、展示の準備から終了にいたるまでの過程を「記録化」することも目指している。以下では、1.「対話」もしくは「協働」の有り様、2.「学問的可能性」の検証、3.「記録化」とは何かの3点について、評者の研究分野の1つである博物館学の知見にも言及しながら論じてみたい。

3.1. 「対話」もしくは「協働」の有り様

本書で登場する、展示する側（各章の筆者）における対話・協働の相手を整理すると、

- ① 展示される人々もしくは展示される対象となっている社会に暮らす人々
- ② 展示を観る人々としての来場者
- ③ 筆者以外の展示制作に係わるスタッフ

となる。「人類学的な調査研究の営みのなかで、展示という形で研究成果の公開を実践した人々の記録である。と同時に、そこから得られた研究を社会に開くということの可能性を探究するも

のである」というのが本書の位置づけであるので、「研究を社会に開く」という観点から、まずは①と②における対話と協働の記述を整理してみたい。

評者は佐々木 (2007: 24-26) において、先住民展示における先住民と展示する側との共同作業 (本書の対話・協働と同義) の有り様を探るため、展示制作過程における共同の段階を次の6つに区分した。

- 1) 企画検討委員会への参加、2) 展示コンセプトの検討、3) 展示シナリオの作成…段階 (A)
- 4) 展示資料の選定、5) 展示資料の提供・製作、6) 展示手法の検討…段階 (B)

つまり、企画内容の意思決定にどの程度関与したかが1)~3)の段階(A)であり、決まった企画内容においてコンテンツ提供や展示演出にどれくらい関与したかが4)~6)の段階(B)である。

この区分に基づいて、展示する側と①展示される人々もしくは展示される対象となっている社会に暮らす人々との対話と協働をみる。なお、落合の報告 (第2章) では、ジュズダマを作る地域の人々が①でもあり②でもあるという関係になっている。この関係は、高倉の報告 (第8章) におけるサハでの展示でも同様のことが言える。

落合報告 (第2章) では、展示される人々が単にスタジオに行って展示を観る、展示物に触れるという係わりであったので、展示制作の段階ではその人々との協働がなかったと考える。一方で、参加者や会場にこれらなかった人に向けた新聞発行は会期終了後の対話を促したと考える。水谷報告 (第4章) では、展示資料の製作を依頼しているので(B)の5)があった。伊藤報告 (第5章) のホビは、(A)と(B)の全般にわたって、観られる人々が主体的に係わっていることがわかる。ただし、これは本公演に限らず、パフォーマンスの世界ではよく見られる傾向と考える。久保田報告 (第6章) においては、モノが集められた地域に暮らす人々から、展示開催前に意見や条件が示され、(A)の2)に近い状況が生まれていると推測する。山崎報告 (第7章) では、(B)の5)で展示される人々が深く関わっていることがわかる。高倉報告 (第8章) では、展示制作に直接関わっていないものの、展示される人々は「シベリアへの手紙」の返信として「日本への手紙」を書き、仙台とサハとの新しい関係を生み出す役割を果たしている。

次に、展示する側と②展示を観る人々としての来場者との対話と協働という観点で見ると、すでに上で述べた第2章と第8章のサハ展示以外では、その様子がわかる報告は山崎報告 (第7章) と高倉報告の仙台での展示 (第8章) の記述である。前者では、会期中の来場者からのアンケート結果から、展示内容に対する満足度や自由記述での感想内容を集計・分析することで、ほぼ正確に展示のねらいが来場者に伝わったことを確認している。このことは、一往復ではあるが、来場者との対話の一つの形と言える。後者では、来場者との直接的な対話に関する記述はないが、展示対象のサハの人々に向けた「シベリアへの手紙」を来場者が書き、展示される人々であり、かつ展示を観る人々であるサハとの対話を生み出している点が面白かった。

このように、①展示される人々もしくは展示される対象となっている社会に暮らす人々、②展示を観る人々としての来場者との対話と協働は、それぞれの報告者においてさまざまな段階や深さで語られており、非常に興味深かった。しかも、人類学に関するテーマを展示にしてこれらの

ことが語られているところに本書の価値があると考ええる。

しかし、やや不十分であると感じる点もあった。第1章の序では、博物館をめぐる近年の状況や論点として、フォーラム型博物館や「対話と連携」に言及している。資料管理に関していえば、フォーラム型ミュージアムとは、従来のテンプル型ミュージアムでの資料を学術専門家が一元的に保管するあり方から脱皮し、民族資料であれば、もともとの所有者やその社会が利用可能な形で情報が提示され、当該社会によるさらなる情報付加といった形で共同管理を可能にするような博物館である。一方、博物館における「対話と協働」では、すべての活動過程において市民との対話と協働が必要であるとしている。また、高倉は本書で、研究を社会に開くということの可能性を探究したいとしている。そうであれば、展示する側と来場者との対話の有り様を各報告者がもっと記述し、検証してしかるべきではなかったか。

最後に、展示する側と③筆者以外の展示制作に係わるスタッフとの対話・協働について言及したい。ここで言うスタッフとは、展示制作チームの同僚や外部の業者であるプロデューサー、プランナー、デザイナーなどを指す。本書では、第2章、第4章、第8章でスタッフとの対話・協働について言及しているが、博物館学の立場から読むと当然のことを記録しているとしか読めなかった。例えば、『The Curator's Handbook』（ジョージ：2015）には、展示を作るにあたって責任者が統括すべき作業項目が網羅されている。つまり、このうちどこをどのスタッフに分担してもらうかであって、本書における③の対話・協働は、その分担の実態を説明しているに過ぎないのではないか。

高倉は本書の前提として、これまで展示制作は博物館学芸員の領域であったとしている。評者はこのことに異論はないが、学芸員もここで報告があった7名の研究者同様、学術的な企画を立案することと全体の統括をするという役割を担っている。つまり、展示制作において大学の研究者とまったく同じ役割を担っていると認識している。展示制作チームの同僚や外部の方々と対話・協働をしながら進めるのが学芸員による展示制作である。評者は、展示制作に係る経験的蓄積の多寡を除いて、博物館学芸員と大学研究者は展示制作に関する立場や役割は何ら変わらないと考える。

そのため、ここではもう一步踏み込んで、民族学・文化人類学を専門としている博物館の学芸員が民族展示を企画・実施する際のスタッフたちとの協働のあり方の検討過程や作業プロセスを、大学に所属する同分野の研究者のそれと比較する試みを期待したかった。それによって、展示制作に係わるスタッフとの対話・協働が、所属する機関の性格によって民族展示での協働の形が異なっているのかどうか明らかになり、たいへん興味深い知見が出てくるのではないかと考える。

3.2. 「学問的可能性」の検証

展示によって達成可能な学問的可能性について明確に示したのは、落合報告（第2章）、水谷報告（第4章）、高倉報告（第8章）の3つであったと評者は捉えた。

落合は、展示制作者としての研究者である自分が伝えたいことと、展示参加者が知りたいこととの間にずれがあることに展示を通して気がついた。それを解消するには、研究成果以上に、研究の前提や周辺を伝え、理解してもらう必要があること。その上ではじめて、研究成果についても納得してもらえらるということを経験した。これはまさに、学術論文による社会への還元ではなく、展示という場を通じた還元であったからこそその気づきであったと考える。さらに、地元スタッフが落合の展示手法や空間の位置づけに共鳴し、「研究カフェ」開設という思いに駆られた点は展示の大きな成果であった。同様の成果として、水谷報告（第4章）におけるキログ氏の自文化へのまなざしの変化を挙げるができる。

高倉はこの学問的可能性について、非常に明快に記述している。その1つは、人類学者による調査研究のアプローチを一度経たのち、本展示の検討に際して、あらためて現地調査で収集した研究資料の分析・解釈を、現地調査に参加していないスタッフたちと協働して行った。つまり、論文で表現された研究成果を単に展示空間に横滑りさせるだけでなく、文化の翻訳作業を再度行った。このことにより、方法としての協働が人類学の研究資料の価値を拡張させたと記述している。また、仙台の来場者が展示の感想を綴った「シベリアへの手紙」に対して、サハでの展示来場者が日本の市民へのメッセージを「日本への手紙」として綴った。これによって、調査地であるサハから、日本の市民に対して文化交流の呼びかけがなされた。この事実を高倉はサハでの展示において最も重要な社会的効果であったと位置づけ、展示が新しい関係を作り出そうとする力を持つとした。

これら以外でも、山口報告（第3章）は、展示という場においてライブで行われる来場者との掛け合いが、ターナーによる社会劇のパフォーマンスそのものであるとしている。また、この展示は数十団体が参加した大阪市立自然史博物館のホネホネサミットの一環で行われたため、他の展示ブース主催者や専門家との交流も生まれ、生物学的な専門知識を学んだとともに、自身の研究が文化人類学の枠を越えて広がっていく可能性をこのサミットで実感できたとしている。また、山崎報告（第7章）では、共有される記憶という概念で、展示を終了した現在でも制作メンバーやそれを観た人々に、対話や経験が共有されているとし、新たな展開につながる可能性を示唆している。

ただし、このような成果や現象は、展示を介さなくても起こり得る成果であり、いかなる資料を用いても、展示で共通して起こる現象ではないかと推察する。民族展示で固有に起こる成果や現象も生じていたはずであり、その点を評者は知りたかった。

3.3. 「記録化」とは何か

展示の「記録化」というテーマは、評者が学芸員であった時も難しいと感じた問題であり、何回か試行してみたが、納得のいく記録はなかなかできなかった。ただし、記録するという行為は、活動を始める前から行動プログラムにインプットしておかないと成立しない行為であることを確信した。

高倉は、展示を実践した本書の筆者たちは展示の記録の必要性に強く共感していると記しているように、落合の報告（第2章）では、展示開催の前後を含めて記述されているため、記録化することを前提に展示を行っていることが窺える。また、掲載されている写真も記録用に使うことを念頭に置いていたと感じられる。伊藤の報告（第5章）では、企画上の交渉と実務上の交渉の経緯や要点が実にわかりやすく書かれている。今後、同様の事業を実施する者にとってどれだけ参考になるかわからない。また、山崎の報告（第7章）でも、展示制作プロセスに沿った詳細な記述があった。

宮瀧（2012：8）は、展示の記録に必要な要素として、展示図録に掲載される①資料一覧、②資料のデータと解説、③調査研究の成果のほかに、④展示室の写真や平面図、⑤会期中の関連事業記録や広報記録、⑥展示企画の意図、⑦来場者を対象に行ったアンケート結果の必要性を示唆している。さらに、⑧展示批評も記録における重要な要素と述べている。

宮瀧の記録化の定義からすると、本書での記録化の試みはまだ不十分なのかもしれない。しかしながら、民族展示に興味を示した高倉らが、記録は何のために必要なのかという目的を明確に共有できれば、自ずと記録化に必要な要素も絞り込まれてくるのではないかと考える。

4. おわりに

ここまで本書の批評を行ってきて、あらためて展示を実践する文化人類学者の興味と博物館学者や学芸員の興味の範囲が異なると感じた。つまり、3.1 や 3.2 で整理したように、文化人類学者は展示という場の外で発生する展示の社会的効果や影響力に関心がある傾向がみられる。これに対して、博物館学者や学芸員は、自分の経験から述べると、展示の場をしつらえることに重きを置き、その場での出来事や現象にもっぱら目が向いている。

最近、博物館学の世界では、博物館の「手段的価値」が問われている（スロスビー 2002；ホールデン 2013）。博物館資料が学術的・文化的価値を持っていることは当然の前提である。その上で、その資料やそれを所蔵している博物館を手段として、例えば地域住民の絆を深める、地域の活性化を図るなどの社会的価値を実現しているかどうか。また、博物館がその地域に存在することで、雇用と所得が生まれたり、来場者が全国各地から訪れることによる経済的な効果が発生したりして、博物館の経済的価値が認められるかどうか、ということである。つまり、両方の価値を含んだ概念が手段的価値である。本書で紹介されているいくつかの報告は、まさに博物館学者や学芸員がこれまで関心を示してこなかった手段的価値の創造に関する実践であり、試行である。評者はあらためて、展示における対話と協働の可能性を感じた。また、国際博物館会議（ICOM）が2004年に改訂した『博物館のための倫理規程』（国際博物館会議 2010）に掲載されている、遺骸や神聖な意味のある資料に関する規程では、資料が由来する地域社会や民族の利益と信仰を考慮することが記されており、文化人類学の考え方が適用されている事例がみられる。

このようなことから、展示を実践する「文化人類学者と博物館学者・学芸員との対話と協働」

を今後進めることで、研究や展示の新たな展開が創り出せるのではないかと考える非常に刺激的な内容の本であった、と評者は捉えた。

参考文献

アイヌ文化振興・研究推進機構編

『アイヌからのメッセージ——ものづくりと心』(展示図録) アイヌ文化振興・研究推進機構, 2005

国際博物館会議

『博物館のための倫理規程』(日本博物館協会訳) 日本博物館協会, 2010

佐々木亨

「アイヌ展示における「対話・共同作業」の現状に関する予備的考察」『北方的——北方研究の構築と展開』(北大文学研究科公開シンポジウム) pp.23-28, 北海道大学大学院文学研究科, 2007

ジョージ, エイドリアン

『The Curator's Handbook 美術館、ギャラリー、インディペンデント・スペースでの展覧会のつくり方』(河野晴子訳) フィルムアート社, 2015

スロスビー, デイヴィッド

『文化経済学入門』日本経済新聞出版社, 2002

高倉浩樹

『日本人のみたトナカイ遊牧民—シベリア民俗写真を現地に戻して展示する試み—』(東北アジア研究センター報告 1) 東北大学東北アジア研究センター, 2010

千葉真弓・徳田由佳子・高倉浩樹編著

『トナカイ! トナカイ!!! トナカイ!!!! 研究成果を市民に還元する自主展示の試み』(東北アジア アラカルト 24) 東北大学東北アジア研究センター, 2010

ホールデン, ジョン

「民主主義社会における文化の価値」福原義春編『地域に生きる ミュージアム』 pp.37-65, 現代企画室, 2013

宮瀧交二

「博物館展示の記録化について」『博物館研究』 47(7) pp.6-9, 日本博物館協会, 2012

山崎幸治ほか編

『先人の手あと 北大所蔵アイヌ資料—受けつぐ技—』(展示図録) 北海道大学総合博物館・北海道大学アイヌ・先住民研究センター, 2009

